つ

舌音にして單子音の一つ。又詰音の假名に用ひらるゝ文字。

つの濁音。

づ

津(名) 船着きの所。●澪。

つ

唾(名) つば。●つばき。

つ

(助動下二段) 他動詞の下に置きて過去の時を示す詞。ぬに似てぬよりは強く又たりに似たり。○「遊びくらしつ」「追ひやりつ」のに同じ。名詞と名詞を結び附くる詞。○「天つ少女」「時つ風」「庭つ鳥」「國つ神」「はじめつかた」「上つ瀬」「昔つ人」

つ

(後)

づ

〔一〕機械又は土地山川等の實狀を表面に書きあらはすもの。用器畫。〔二〕畫。〔三〕音樂の調子の標準とするもの。○「圖竹」「圖紙」

づ

頭(名) かしら。●あたま。

づ

徒(名) 古代の罪名。一年以上三年以下の期限を以て使する懲役。

つゐ

對(名) 〔一〕物事の二つづゝ揃ふ事。●又揃ひたる物。〔二〕同樣。●同一。〔三〕對句の略。

ついゐる

(自動一段) 〔一〕ちょとすわる。●跪づく。○源氏「殿もついゐ給ひて」〔二〕居るに同じ。○枕「犬の柱のもとについゐたるを」

ついばむ
ついばこ

啄(他動四段) 鳥類の嘴にて物を食ふ。

對箱(名) 德川時代。大名の行列に其格式により二つ並べて挾箱を持たする事。

つひに

(他動四段) 挾むに同じ。(宇治)

終。遂(副) 終りに。●とうく。●しまひには。△(形)—つひの。○詞花「留まらん留まらじとも思ほゆず何くもつひのすみかなられば」

つゐばう

追放(名) 德川時代の刑罰。其土地を追ひ拂ふもの。

つゐたう

追討(名) 官命を帶びて賊を討つ事。△(動)—追討す。

つゐたうし

追討使(名) 兵を卒ゐて追討に向ふ敕使。

ついぢ

築地(名) 土にて堤の如く厚く築き瓦にて屋根を葺きたる塀。昔し貴族の家の外圍には必ず設けたるもの。●つきがき。○著聞「ついぢの上に撫子をおびたゝしく植ゑられた

つゐか

追加(名)　後より補ひ加ふる事。△(動)―追加す。

ついがさね

衝重(名)　折敷を重箱の如く重ねたる古代の食器。

ついがき

築垣(名)　築地に同じ。(和名抄)

ついたち

朔日(名)　月立の音便にて月の空に見ゆ初むるの意。◎〔一〕太陰暦にて其月の初めの頃。●初旬。●上旬。○榮花「ついたち六日の夜中になり」落窪「十二月のついたち五日と定めたるほどは」〔二〕月の第一日。

ついたちさゝうじ

衝立障子(名)　ついたてに同じ。○著聞「小野宮の大臣ついたちさうじに松をかゝせんとて」

ついたつ

(自動四段)　〔一〕立つに同じ。〔二〕つと立ちあがる。●俄に立つ。○平家「つい立ちて六位や候ふと召されければ」

ついたけ

(名)　着丈一杯に裁ちたる衣服の丈。

ついたて

衝立(名)　室内に置きて物の隔てとするもの。障子或は襖の如きものに足を附けて何處にも持ち行き置き得る樣に造る。

ついたてさゝうじ

衝立障子(名)　ついたてに同じ。(枕)

つゐそう

追從(名)　ついしょうに同じ。△(動)―つゐそうす。○源氏「童なれば殿居人なども殊に見入れつゐそうせず」

ついづ

叙(他動下二段)　順序を立つる。

つゐな

追儺(名)　昔し禁中にて十二月晦日の夜行はれたる疫氣拂の儀式。鬼やらひともなやらひとも云ふ。公事根源に「大舍人寮鬼(疫鬼に擬する役)を勤め陰陽寮祭文をもて南殿の邊につきて讀む。上卿以下これを追ふ。殿上人ども御殿の方に立ちて桃の弓・葦の矢にて射る」とあり。

つゐく

對句(名)　詩歌文章にて二句づゝ相對し用ふる同語調の句。……春風桃李花開時。秋雨梧桐葉落時の類。

つゐぐす

追求(他動サ變)　追ひ求むる。●尋ね搜す。○謠曲「名利身を助くれども未だ北邙の煙を免かれず。恩愛心を惱ませども。誰か黄泉の責に從はざる。之が爲めに馳走す。所得いくばくの利ぞや。之によってつゐぐす。所作多罪なり」

つひィやす　費(他動四段)　費にしむる。●減らしむる。●なくする。●消費す。

ついまつ　續松(名)　松明(たいまつ)の古名。○空穗「ついまつともしわたして」

つゐけい　追啓(句)　手紙の詞。本文を終りて後又何か言ひ殘したる事を書き加ふること。●追白。

つゐぶ　追捕(名)　惡徒を召し捕ふる事。△(動)―つゐぶす。

つゐふく　追福(名)　追善に同じ。

つゐぶし　追捕使(名)　追捕を任とする役人。昔は諸國に置かれたり。

つゐこう　堆紅(名)　堆朱に同じ。

つゐこく　堆黑(名)　塗物の一種。黑漆を厚く重ねたるもの。

つひィえ　費(名)　費用。●錙銖の費用。

ついで　序(名)　〔一〕叙づる事。●順序。●次第。〔二〕折。●場合。●機會。○古今「上に候ふ男どもの歌よみけるついでによめる」伊勢「ついで面白き事とや思ひけん」〔三〕幸便。

ついで　尋(副)　引き續きて。●間もなく。●やがて。

ついさす　(他動四段)　すべてさすに同じ。○源氏「紐ついさしなどしておはす」落窪「撥ついさし給へるを」

つひィゆ　費(自動下二段)　段々に無くなる。●段々に減る。

つひィゆ　潰(自動下二段)　軍勢の總崩れとなる。

つひィゆ　瘠(自動下二段)　肉の薄くなる。●瘠する。○源氏「年頃いたうつひえたれど猶物清げに」

ついゆがむ　(自動四段)　ゆがむに同じ。○和泉式部集「筆もついゆがみて物の書かるゝは」

ついし　鎚子(名)　古代の菓子の一名。(和名抄)

つゐしゅう　追從(名)　媚び諂ふ事。●阿諛。●おせじ。△(動)―追從す。

つゐしゅ　堆朱(名)　塗物の一種。朱漆を塗り重ねたるもの。

ついひぢ　築土(名)　築地に同じ。○伊勢「ついひぢのくづれより通ひけり」

ついひざまづく　突跪(自動四段)　ひざまづくついゐるに同じ。(今物語)

つゐぜん　追善。追薦(名)　死者のためにする佛事。●追福。△(動)―追善す。

つぬす

對（自動サ變）〔一〕相對する。●よく配合する。〔二〕對句にする。

つぬすう

（他動下二段）据うに同じ。○枕「土器はついすゑつゝ」

づろう

杜漏（名）杜撰粗漏の意。物事に規律の正しからぬ事。●投遣り。△（形）—杜漏なる。（副）—杜漏に。

つば

鍔。鐔（名）刀劍の欄と身との隔てにある金屬製のもの。

つば

唾（名）つばきに同じ。

つばひィ

（名）鳥の名。燕の古名。

つばいもちひィ

椿餅（名）つばきもちに同じ。（源氏）

つばいもも

椿桃（名）桃の一種。毛なくして椿に似たる實を結ぶもの。

つばな

茅花（名）茅の花。春の末穗に出づるを小兒等の拔き取りて食ふもの。……古は之を食へば身肥ゆると言ひ傳へたり。

つばらに

（副）つまびらかに。●詳細に。●ねんごろに。●丁寧に。○萬葉「つばらにも見つゝ行かむを」

つばらか

つまびらかに同じ。●詳細。●ねんごろ。（形）—つばらかなる。（副）—つばらかに。○萬葉「奥山の八峯の椿つばらかに今日は暮らされ大丈夫の友」

つばらつばらに

（副）明細に。●つばらかに。●つまびらかに。●ねんごろに。●丁寧に。○萬葉「朝開き入江漕ぐなる檝の音のつばらつばらに吾家し思ほゆ」

つばくら

（名）鳥の名。＝つばめに同じ。

つばくらめ

（名）鳥の名。＝つばめに同じ。

つばさ

翼。翅（名）鳥類の左右の羽。

つばき

椿（名）木の名。葉の形茱に似て厚く光澤あり。牡丹に似て小さく肉厚き紅白の花咲くもの。

つばき

唾（名）口中に分泌する一種の液。●つ。●つば。●唾液。

つばきもち

椿餅（名）椿の葉に包みたる餅。

つばめ

燕（名）鳥の名。春雁の去る頃來りて秋雁の來る頃去る小鳥。色黑くして尾は二股を爲し巢を人家に結びて雛を孵化す。●つばくらめ。●つばくら。

つぼ

壺（名）〔一〕口の窄き瓶。〔二〕本膳の料理に用ふ

る食器の名。平に似て小さく深きもの。〔三〕目當にする點。〔四〕壺の如く凹になりたるところ。○「瀧の壺」

つぼ

坪(名)　〔一〕六尺四方の地面。〔二〕家の内庭。……おもに禁中に云ふ。……假字にて壺とも書く。○續拾遺「蹇盤所の坪に雪の山つくられて侍りける朝」〔三〕禁中にて御殿の名。◎其内庭の樹木などより出でたる名。○「桐壺」「藤壺」「梅壺」「梨壺」

つぼ

匏(名)　笙の胴。(和名抄)

つぼとる

(他動四段)　衣の裾を折りて前の帶に挾む。(雅亮裝束抄)

つぼめ

(他動下二段)　つぼめる。●すぼめる。●狹める。○榮花「おの〳〵屏風をつぼれつゝ」

つぼをり

壺折(名)　つぼをる事。●つぼをりにしたる服裝。

つぼをる

(他動四段)　つぼとるに同じ。

つぼさッうぞく

壺裝束(名)　市女笠と薄衣(うすぎぬ)とを着たる女の服裝。○源氏「女房あるかぎりつぼさうぞくして」

つぼね

局(名)　〔一〕部屋。●女官の部屋。〔二〕奥女中の稱。○「伊賀局」「春日局」

つぼねがさ

(名)　つぼみ笠に同じ。○長門本平家「濃き墨染の衣につぼね笠を着て」

つぼねまち

局町(名)　昔し禁中に局々の多く立ち並びたる場所。

つぼなげ

壺投(名)　壺折の一名。(和名抄)

つぼむ

(自動四段)　〔一〕口の狹くなる。●縮まる。●すぼまる。〔二〕花のまだ開かずにある。●蕾の出來る。

つぼむ

(他動下二段)　〔一〕つぼましむる。〔二〕屏風、扇、傘などを疊む。

つぼうち

壺打(名)　壺に矢を投げ入れて其數の多少もて勝負を決する昔の遊戲。(和名抄)

つぼや

壺屋(名)　部屋。●局に同じ。○今昔「母のありけるを一つの壺屋に置きて子二人は家を衛り別けて居たりけるが」

つぼやか

壺の如く四面圍まれたる有樣。(形)―つぼやかなる。(副)―つぼやかに。

つぼやなぐひィ

壺胡籙(名)　胡籙の一種。筒形に作りたるも

の。〔圖〕

つぼやき 壺燒(名) 榮螺を壺の儘に燒きて味を付けたる食品。

つぼまる (自動四段) つぼむ樣になる。●狹まる。●すぼまる。

つぼみがさ (名) 市女笠の一種。常のより深くして形つぼみたるもの。○新六帖「降りやまぬ雪間の梅のつぼみ笠思ふ心のいつか開けん」

つぼし 圖星(名) 目的としたる點。

つぼすみれ 壺菫(名) 〔一〕菫に同じ。◎花の形壺に似たる故の名。○萬葉「山吹の咲きたる野邊のつぼすみれ此春の雨にさかりなりけり」 〔二〕衣の重の色目。表紫、裏青。

つべたまし (形。形狀言シク活) 冷たき魂の意にや。◎にくたらし。●厭はし。○蜻蛉「こたみさへおりすばいとつべたましきさまに世人も思ほん」

つと 苞。土產(名) 〔一〕食品など藁にて包みたるもの。 〔二〕みやげ。

つと (名) 女の髮のたぼ。

つと (副) じっと。●ひしと。●ひたと。○源氏「つと御かたはらに添ひ暮らして」同「胸もつとふたがりて」

つど 都度(名) 度。●折。

つどに 夙(副) 朝早く。○萬葉「つどに行く雁の鳴く音は我如く物思ふかも聲のかなしき」

つとむ 勉。勤。務。努(自動下二段) 〔一〕勤務する。●奉公する。〔二〕勉强する。●骨折る。●はたらく。

つどふ 集(自動四段) 集まる。●集合する。

つどふ 集(他動下二段) つどはしむる。●集むる。

つどまる 勤(自動四段) 勤め得らるゝ。●勤務に堪ふる。

つとめ 勤。務(名) 〔一〕勤務。●職務。●役目。●奉公。〔二〕佛に仕ふる行ひ。念佛讀經の類。

つとめて (名) 早朝。○宇治「つとめて毎にうがゝひ見れば」

つとめて (副) 朝早く。○更科「十七日つとめて立つ」 〔二〕翌朝。○源氏「つとめて少し寐過し給ひて」

つち 地(名) 地球。

つち 土(名) 陸地の面を被ひて草木など生長せしむる

つち

槌(名)　〔一〕物を打ち叩く道具。〔二〕紋の名。〈圖〉

つちいむ

土忌(自動四段)　土忌をする。(狹衣)

つちいみ

土忌(名)　暦に記せる土公神の居る方角を忌む事。……物事を爲すにその方角を避けて他に轉じ替ふる風俗事ら中古に行はれたり。○更科「三月つごもりがた土忌に人のもとに渡りたるに」

つちばち

土蜂(名)　蜂の一種。土中に巣を作るもの。

つちはらひ

土拂(名)　昔の車に附きたる泥除の具。

つちばし

土橋(名)　どばしに同じ。

つちばじかみ

土薑(名)　生薑の古名。

つちぼとけ

土佛(名)　土にて造りたる佛像。

つちど

土戸(名)　外面を土にて塗りたる戸。常に土藏などに用ふ。

つちどの

土殿(名)　土藏造りの如くしたる殿。(榮花)

つちかふ

培(自動四段)　草木に土を掛けて養ふ。培養する。

づちやう

圖帳(名)　田畠の繪圖。昔し民部省に備へられたるもの。

つちだら

(名)　獨活の古名。(和名抄)

つちのと

己(名)　十干の六番目。

つちのえ

戊(名)　十干の五番目。

つちぐるま

土車(名)　土を載せて運搬する車。

つちぐるまくれ

槌車(名)　紋の名。〈圖〉

つちくれ

土塊(名)　〔一〕土のかたまり。〔二〕齋宮の忌詞。墓。

つちぐら

土藏(名)　〔一〕穴藏。〔二〕どざう。

つちぐも

土蜘蛛(名)　〔一〕蜘蛛の一種。地中に袋の如き巣を作りて住むもの。〔二〕上古時代に穴居せし土人の稱。(紀)

つちやき

土燒(名)　素燒の土器。……かはらけの類。

つちけむり

土煙(名)　煙の如く立つ砂埃。

つちふまず

(名)　足の裏の凹みたる所。

つちぐみ

土公(名)　土公神に同じ。

つちもん

土門(名)　左右に高く土を積み上げて土手をなし其間に立てたる門。

つり

釣(名)　〔一〕魚を釣る事。〔二〕書き物のかなたとこなたと連絡せしむる爲めに引き渡す線。

〔三〕物の價を拂ふ時こなたへ取り返すべき餘計の金錢。

つりいと 釣糸(名) 魚を釣る時に用ふる糸。

つりばり 釣針。鉤(名) 魚を釣るに用ふる乙字形の針。

つりばし 釣橋(名) 橋杙を用ひず綱などにて釣りたる橋。

つりぼり 釣堀(名) 魚を飼ひ置き入場料を取り之を釣り遊ばしむるために設けたる堀。

つりどうろう 釣燈籠(名) 燈籠の一種。軒などに釣り下ぐるもの。

つりどの 釣殿(名) 昔し貴族の家にて遣水に臨み魚など釣り遊ぶやうに作れる建物。しんでんづくりの圖を參考せよ。

つりを 釣緒(名) 釣糸に同じ。(紀)

つりがね 釣鐘(名) 釣り置きて撞き鳴らす鐘。

つりがねさうう 釣鐘草(名) 草の名。夏の頃鐘に似たる紫の花咲くもの。

つりだい 釣臺(名) 品物又は病人など乘せて二人にて擔ふ臺。

つりなはッ 釣繩(名) 魚を釣る時に用ふる繩。○古今「伊勢の海の海士の釣繩うちはへて」

つりのを 釣緒(名) つりをに同じ。○萬代「浦なぎにつりのを垂れて」

つりまなこ 釣眼(名) 能面の名。

つりぶね 釣船(名) 魚を釣る船。

つりて 釣手(名) 〔一〕蚊屋など釣るための紐。〔二〕魚を釣る人。又其上手の人。

つりあひイ 釣合(名) 釣り合ふ事。●權衡。

つりあふウ 釣合(自動四段) 双方輕重の差なくなる。●權衡を取る。

つりざを 釣竿(名) 魚を釣るに用ふる竿。

つりじとみ 釣蔀(名) 蔀の一種。釣り上ぐる樣に作りたるもの。

つの 角(名) つの〜古言。

つぬ (名) 蔦の古言。

つぬさはふウ (枕) 岩に掛かる枕詞。◎つぬは蔦の古言なれば蔦の多に這ふ岩と續く意にやあらん。○紀「つぬさはふ磐余の池の」萬葉「つぬさはふ石見の海の」

つる 鶴(名) 鳥の名。頸長く嘴長く脚長く大方毛は白くして羽尾の先に黑色を交へたり。世俗千年の壽を保つべき鳥と想像す。

つる 蔓(名) 細く長く延びて他の草木などに纏はりつく草の莖。

つる 弦(名) 弓に張る糸。●ゆづる。

つる 鉉(名) 鍋土瓶などの上に提げて持つやうに附けたる把手。

つる 連(自動下二段) 伴なふ。●同道する。●連れ立つ。

つる 連(他動下二段) 伴ひゆく。●隨へ行く。●卒うる。

つる 釣(他動四段) 〔一〕端を他の物に懸けてぶらさがらす。●つるす。〔二〕釣針にて魚を取る。〔三〕おびきだす。●だまして捕ふる。

つる (自動四段。又下二段) 〔一〕引張り寄せらるゝ。〔二〕引張らるゝやうに腹などの痛む。

つる (助動) つの變化。○古今「ぬれつゝぞ強ひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば」

つるばぎ 鶴脛(名) 衣の裾を高くかゝけて脛を長く出だす事。その形立ちたる鶴の脚に似たるよりの名。(空穗)

つるばみ 橡(名) 〔一〕樫の實。●どんぐり。(和名抄) 〔二〕古代染色の名。橡の實の煮汁にて染めたる濃き鼠色。鈍色に同じ。○萬葉「つるばみの衣」〔三〕橡の色にて染めたる衣。○榮花「上達部殿上人などさながらつるばみを着給へり」

つるばしり 弦走(名) 〔一〕鎧の名所。胴の左脇の皮にて包みたる處。弓を執る時弦の引っ掛るを防ぐためのもの。〔二〕弓の弦の切るゝ事。

つるべ 釣瓶(名) 井戸の水を汲み上ぐる器。

つるべなは 釣瓶縄(名) 釣瓶に附けたる縄。●井戸縄。

つるりと (副) 滑らかなるものを撫づるやうの有樣。○著聞「其鳥を捕へて毛をつるりとむしりて」

つるむ (自動四段) 禽獸虫魚の交接するといふ。●孳尾する。●交尾する。

つるうち 弦打(名) 弓の弦を打ち鳴らす事。惡鬼を畏れしむるための術。●鳴弦の法。(源氏)

つるのはやし 鶴林(名) 印度にて釋迦の入滅せし娑羅双樹の林。◎入滅を悲しみて樹の色忽に白色に變じ白鶴の如く爲りたりといふ故事。○長秋詠藻「なしむかな月の御顏も影消え

て鶴の林に煙たえけん」

つるのまる 鶴丸(名) 模様の名。鶴の兩翼を張りたる處を丸く畫かきたるもの。〔圖〕

つるくさ 蔓草(名) 蔓の生ずる草の總名。

つるまき 弦卷(名) 武具の名。掛替の弓弦を卷き附けて腰に佩ぶる環形の器。

つるぶ (自動四段) つるむに同じ。禽獸虫魚の交接するをいふ。●交尾する。

つるぶくろ 弦袋(名) 武具の名。掛替の弓弦を入るゝ袋。

つるぎ 劍(名) かたな。●けん。●太刀。

つるぎは 劍羽(名) 鴛鴦の背にある思羽の一名。

つるぎたち 劍太刀(名) つるぎに同じ。

つるぎたち 劍太刀(枕) 〔一〕身に添ふの枕詞。常に身に添へ佩くものゆゑ。○萬葉「劍太刀身に添へ寢けむ」〔二〕磨ぐの枕詞。○萬葉「劍太刀とぎし心を」〔三〕名の枕詞。なほ刄物の稱なれば續けたり○萬葉「劍太刀名の惜しけくも吾は無し」〔四〕心の枕詞。心ば劍の身なれば續けたり。○萬葉「劍太刀しが心から」〔五〕ひ音に掛かる枕詞。上古刀の類をひと稱へ一故ならんとの說あり。○紀「劍太刀日嗣の皇子」

つるぎのやま 劍山(名) 地獄にありと云ふ想像の山。刀劍の身を逆さまに植ゑて罪人を登らするところ。

つるぎのえだ 劍枝(名) 地獄にありと云ふ想像の木にて枝葉悉く劍の身にて成り立ちたるもの。一名劍樹(りんじゅ)。○金葉「地獄の畫に劍の枝に人のつらぬかれたるを見てよめる。和泉式部 あさましや劍の枝のたわむまでこは何の身のなれるなるらん」

つるしがき (名) 澁柿をつるし干して甘くしたるもの。

つるす 吊(自動四段) 釣り下ぐる。

つわい (感) 螺貝を吹き鳴らす音。(狂言)

つはり (名) 〔一〕婦人妊娠の兆として起る病。酸氣の食を求め常に嘔吐を催すもの。〔二〕芽ぐむ事。

つはる (自動四段) 〔一〕孕む。●妊娠の兆のあらはる

〜」○落窪「いつしかとつはり給へば」〔二〕芽ぐむ。●きざす。○金葉「葉がくれにつはるとみえし程もなくこは熟梅になりにけるかな」

つはぶき（名）草の名。蕗に似て葉厚く光澤あるもの。秋の頃蒲公英に似たる黄色の花咲く。

つはものの　兵（名）〔一〕武器。〔二〕武士。●兵士。●勇士。

つはものどねりのつかさ　兵衛府（名）ひゃうゑふに同じ。（和名抄）

つはものの つかさ　兵部省（名）ひゃうぶしゃうに同じ。（和名抄）

つはものぐら　兵庫（名）兵器を入るゝ庫。●武庫。

つはものぐらのつかさ　兵庫寮（名）ひゃうごれうに同じ。（和名抄）

つか　塚（名）〔一〕土を小山の如く盛り上げたるところ。〔二〕墓。

つか　柄。欄（名）物の柄の手にてつかむ處。……おもに刀劍、筆などに云ふ。

つか　束（名）〔一〕物をつかみたる指四本の長さ。○「八束穂」〔二〕短き時間。●暫時。○萬葉「東のあひだも我忘れめや」

つが　樛（名）黄楊の古名。（萬葉）

つかひィ　栂（名）木の名。とがに同じ。

つがひィ　使（名）使はるゝ人。●使者。

番（名）〔一〕番ふ事。又番ひたる物。〔二〕鳥又は獸の雌雄牡牝。〔三〕相撲歌合などの如く東西左右組み合ひたるもの、一組。

つかひィどころ　仕所（名）院の御所にて種々の御用を達する役所。

つかひィだち　遣太刀（名）進物にする料の太刀。

つかひィざね　使實（名）使者中の主たる役。●正使。（伊勢）

つがひィめ　番目（名）番ひ合せたる所。

つかばしら　束柱（名）柱の一種。梁と棟との間に立つる短きもの。（和名抄）

つがり　（名）くさり。●糸などくさりの如き形に連れ繋きたるもの。

つかぬ　束（他動下二段）纏めて括る。●たばぬる。

つかる　漬（自動四段）水に浸る。

つかる　疲。勞（自動下二段）體力又は氣力の衰ふる。●疲勞する。●くたびれる。

つがる（他動四段）糸などくさりの如き形に繋ぎ連ぬる。

つかはしめ（名）神佛の使ひ給ふ動物の稱。八幡の鳩、稲荷の狐の類。

つかはす（他動四段）遣（他動四段）やる。●送致する。●贈る。●進物する。

つかれ（名）疲ろゝ事。●疲勞。

つかつか（副）急に歩み寄る有樣。（又）―つか〳〵と。

づかづか（副）鋸にて木を挽く音。（狂言）

つかね（名）〔一〕束れたるもの。〔二〕藁など束れて作りたる莚。（盛衰記）

つかながに（副）櫛長に。刀の櫛を長く延ばして手に取る有樣。○謠曲「もとより好める大太刀を。つかながに追っ取りのべて」

つかなぎ（名）手にて握らるゝ程の大きさの木。……杖棒の類。（紀）

つかなみ（名）束ね編みの意。◎藁を束ねて編みたる莚。○方丈記「つかなみを敷きて夜の床とす」

つからす（他動四段）疲れしむる。

つかむ（他動四段）摑。攫（他動四段）物を掌に握り込む。

つかんまつる（自動。又他動四段）つかうまつるに同じ。

つかふ（他動四段）使（他動四段）用に立たする。●使用する。●使役する。

つかふ（自動下二段）支（自動下二段）妨げられて滯る。●障りの起る。

つかふ（自動下二段）仕（自動下二段）目上の人に使はるゝ。●仕官する。

つかや（名）塚屋。塚の上などにある家。（宇治）

つかまつりびと（名）仕人。奉仕する人。●奉公人。（宇治）

つかまつる（他動四段）仕（他動四段）つかうまつるに同じ。手紙にては致すより一層念の入りたる詞。

つかまつる（自動四段）仕（自動四段）つかうまつるに同じ。（空穗）

つかまふ（他動下二段）摑み捕ふる。

つがふ（自動四段）番（自動四段）〔一〕二つの物の組み合ふ。〔二〕禽獸の配偶する。又交接する。

つがふ（他動下二段）番（他動下二段）〔一〕番はしむる。〔二〕弓の弦に矢を掛くる。

つかのま（名）束間。僅の間。●暫時。●一寸の光陰。

○萬葉「夏野ゆく牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや」

つがのきの　欅木の（枕）　つぎ〳〵の枕詞。つがとつぎと音の近き故に重ねたり。○萬葉「つがのきのいやつぎ〳〵に」

つかぶな　束鮒（名）　小さき鮒。（萬葉）

つかへヱ　支（名）　差支。●故障。

つかへヱ　仕（名）　仕官。●役目。

つかへヱ　痞（名）　癪などにて胸の苦しむ事。

つかへヱ**まつる**　仕奉（他動四段）　貴人に對して云ふ詞。●爲し奉る。●行ひ奉る。●つかまつる。

つかへヱ**まつる**　仕奉（自動四段）　仕ふの敬語。●奉仕する。○新勅撰「降る雪の白髮までに大君に仕へ奉れば尊くもあるか」

つかさ　（名）　〔一〕（官）くわん。●役。●職務。〔二〕役所。……官、省、臺、職、坊、寮、司、監、署、府、局、すべてつかさと稱ふ。

つかさ　（名）　平地の小高き處。○「市のつかさ」「野づかさ」（雅）

つかさどる　掌。司。主（他動四段）　役目とする。●擔任する。●專任する。●主宰する。

つかさな　官名（名）　くわんめい。（枕）

つかさめし　司召（名）　古へ在京官吏の任官式。三月または八月に行はるゝを定期とし又臨時にも行はれたり。○榮花「司召に少將に爲らせ給ひて」

つかさびと　官人（名）　官吏。●役人。

つがみ　圖紙（名）　音律を調ふるため篳篥の舌に貼り附くる紙。

つかみあひイ　摑合（名）　摑み合ふ事。

つかみあふヨウ　摑合（他動四段）　喧嘩などにて互に取組み合ふ。

つよる　強（自動四段）　強くなる。

つよむ　強（他動下二段）　強くする。

つよし　強（形。形狀言ク活）　堅し。●剛し。●鋭し。●猛し。●甚し。

つた　蔦（名）　〔一〕臺草の名。大木などに纏はりつきて秋美しき色に紅葉するもの。〔二〕紋の名。〔圖〕

づた　頭陀（名）　行脚して食錢を乞ひあるく僧。

つたはる　傳（自動四段）　傳ひて來る。●傳ひて行く。

つたよふッ　（自動四段）　さまよふ。●たゞよふ。○散木

つたつた

「わぶる山世にふる道を蹈みたがへまどひつたよふ身をいかにせん」

（副）　切れ〳〵に。●ばら〳〵に。●絶え絶えに。○新後拾遺「足引の山のつた〳〵見えつるは春の霞のたてるなりけり」（又）―つた〳〵に。○夫木「朝日さすかたの村霧はれやらで山つた〳〵に見ゆる秋かな」

つたつた

（副）　切れ〳〵に。●きだ〳〵に。●寸々に。●ばら〳〵に。（又）―つた〳〵に。○謠曲「鬼神は通力失せ。あらばれいづれば忽に。つた〳〵に切り放し」

つたなし

拙（形。形狀言ク活）　〔一〕下手な。●不手際な。〔二〕不運な。●不仕合な。

つたふ（トフ）

傳（自動四段）　其物に附き添ひてゆく。

つたふ（トフ）

傳（他動下二段）　己の受けたるものを人に又授くる。

づだけ

圖竹（名）　吹き試みて音樂の調子を合はすために作りたる標準の竹管。

づだぶくろ

頭陀袋（名）　頭陀の僧の頸に懸けて食など入るゝ袋。

つたへ（ユ）

傳（名）　傳ふる事。●傳へられたる事。●傳授。●相傳。

つだみ

（名）　幼兒の乳をあます事。○源氏「此君いたく泣き給ひつだみなどし給ふ」

つれ

連（名）　〔一〕同行者。●同伴者。●連中。〔二〕能樂にてシテ又はワキの助役者。

つれだつ

連立（自動四段）　相伴ふ。●同伴する。

つれそふ（ウ）

連添（自動四段）　夫婦となる。

つれづれ

徒然（名）　さびしき事。●さぜん。●無聊。○玉葉「ながめする緑の空もかきくもりつれ〴〵まさる春雨ぞ降る」△（形）―つれ〴〵の。（又）―つれ〴〵なる。○枕「つれ〴〵なる里居のほど」（副）―つれ〴〵に。○源氏「いとつれ〴〵に人目も見えぬ所なれば」（又）―つれ〴〵と。○伊勢「つれ〴〵と籠り居りけり」

つれづれがる

（自動四段）　つれ〴〵に思ふ。●さびしさを感ずる。○顯季集「人々つれ〴〵がりて戀歌よみしに」

つれなし

（形。形狀ク活）　知らぬ顏して居る。●情がこはい。●心强し。●無頓着な。●無情な。●ごうよくな。○源氏「ことさらに情なく

つれなきさまを見せて」金葉「弓張の月の入るにも驚かでつれなく立てる鹿の島かな」

つれなしがほ（名）そしらぬ顔。○源氏「つれなしがほなるしもこそいたけれ」

つれなしづくる（自動四段）偏に知らぬ顔して居る。○源氏「つれなしづくれどおのづから見知りぬ」

つれぶし（名）連節。同音に唄をうたふ事。

つれこ（名）連子。再縁者の引連れて來る先夫又は先妻の子。

つれあひ（名）連合。夫又は妻。●配偶者。

つれびき（名）連彈。琴三味線など合奏する事。

つれもなし（形。形狀言ク活）つれなしに同じ。○古今「つれもなき人をやねたく白露の置くとに嘆き寢とは忍ばん」

つつ（名）筒。〔一〕大きく短き管。〔二〕鐵砲。〔三〕烏帽子の頭にはまる處。○曾我「烏帽子の筒を押立て直垂の衣紋ひきつくろひ」〔四〕井筒。〔五〕花筒。

つつ（數）十。とを。●じふ。（文選古訓）

つつ（後）〔一〕彼をしながら此をする時に用ふる詞。○「歌ひつゝ舞ふ」「見つゝ思ふ」〔二〕同じ働を屢する時に用ふる詞。○古今「梅が枝に來居る鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつゝ」

づつ（後）別々の人または別々の時に配當する意味を示す詞。○「おの〳〵一首づゝよむ」

つつゐ（名）筒井。筒の如く堀り下げたる井戸。●または井筒を構へたる井戸。

つっぱり（名）突張る事。●又突張りて支へ持つ物。

つっぱる（他動四段）突き張る。●物の支を爲す。

つづり（名）〔一〕綴る事。〔二〕綴りたる衣。●つゞれ。〔三〕裂裟の一名。

つづる（他動四段）繼ぎ合はする。●縫ひ合はする。●組み合はする。●彼是を合せて全き物を作る。

つつが（名）恙。病氣災難。○空穗「足手のつゝがもあらば」

つつがなし（形。形狀言ク活）恙無。身に病の無き。●別條の無き。●安全な。●無事な。

つづれ（名）襤褸。綴り合せたる衣服。

つづら 葛籠(名) 〔一〕葛の蔓にて編みたる籠。〔二〕竹などにて編み紙張にしたる器。衣類など入るゝもの。

つづら 葛(名) かづらに同じ。蔓草。

つづらばこ 葛笥(名) 葛を編みて作れる箱。(延喜式)

つづらをり 九折(名) くの字を數多繋ぎたるが如く右に折れ左に折れうねりたる山道。●羊腸。○源氏「此つゞらをりの下に」

つづらか つぶらに同じ。●丸き事。(形)—つゞらかなる。○榮花「目もつゞらかなる小法師にて」△(副)—つゞらかに。○大鏡「目をつゞらかにさし出で給へるに」

つづらこ 葛籠(名) つゞらばこに同じ。(保憲女集)

つつむ 包(他動四段) 〔一〕物を中に入れて外から被ふ。〔二〕隱す。●秘する。

つつむ (自動四段) 愼む。●遠慮する。

つづく 約(他動下二段) 〔一〕輕便にする。●短く縮むる。〔二〕語學上にて二音を一音に合する。○「つてを約めてとなす」

づつう 頭痛(名) 病にて頭の痛む事。

つつく (他動四段) 〔一〕度々突く。●つゝつく。●叩く。〔二〕鳥の嘴にて物を食ふ。●ついばむ。

つづく 續(自動四段) 斷ずに進む。●つながる。●連續する。

つつやみ 續(他動下二段) 續かしむる。

つづまり (名) 眞の闇。○今昔「つゝやみにして物も見えず」

つづまる 約(名) 〔一〕つゞまる事。〔二〕語學上にて二音の合して一音となる事。●約音。

つづまやか 約(自動四段) 〔一〕輕便になる。●短く縮まる。〔二〕語學上にて二音合して一音となる。……「雪消えつゞまりて雪けとなる」の類。

つつまし 約まりたる有樣。●儉約なる有樣。(形)—つゞまやかなる。(副)—つゞまやかに。

つづまやかに (形。形狀言シク活) 心に物の扣へらるゝ有樣。●遠慮せらるゝ有樣。●はづかし。●きまりがわるい。○源氏「つゝましけれどねざりいでゝ」

つつげ (名) 生れ立の鳥の毛。(和名抄)

つづけざまに 續樣に(副) 引續けく〳〵て。●何度も何度も續けて。

つつえり 筒領(名) 裝束にいふ詞。—くびかみに同じ。

つつさき
筒先(名)　銃砲などの筒の先。

つづき
續(名)　〔一〕續く事。〔二〕續きたる物。●血統。●緣類。

つつぎり
筒切(名)　料理にて筒の如き形に切る事。

つつめく
(自動四段)　さゝやく。●さゝめく。●つぶやく。○土佐「つゝめきてやみぬ」

つつみ
堤。塘(名)　水を防ぐ爲の土手。●堤防。

つつみ
包(名)　包む事。●包みたる物。

つつみ
(名)　病氣。(萬葉)

つづみ
鼓(名)　〔一〕木の胴に革を張りたる樂器の總名。〔二〕特には大鼓(おほつゞみ)、小鼓の總名。〔三〕普通には小鼓のみの稱。〔四〕上古にては太鼓(たいこ)。

つつみゐ
包井(名)　草などの下に包み隱されたる井戸。●又一說には垣を結ひ廻したる井戸。(萬葉)

つつみがはら
堤瓦(名)　棟より軒先まで堤の如く並ぶる瓦。(和名抄)

つつみなし
(形。形狀言ク活)　つゝがなしに同じ。(萬葉)

つつみやき
包燒(名)　肉を他の魚の腹などに包みて燒きたる食品。○宇治「鮒のつゝみやき」

つつじ
躑躅(名)　灌木の名。春の末梢梗に似たる花咲くもの。紅白紫黃などいろ〳〵あり。

つづしろふ
(他動四段)　つゞしるに同じ。○萬葉「堅鹽を取りつゞしろひ」

つづしる
(他動四段)　〔一〕一口づゝ食ふ。●少々食ふ。○今昔「鮭鯛鹽辛などをつゞしるほどに」〔二〕一口づゝ歌ふ。●文句を少しづゝとぎれ〳〵に歌ふ。○源氏「影もよしなどつゞしりうたふほどに」

つつしむ
慎。謹(他動四段)　粗略ならぬやうに恭しくする。●謹慎する。●遠慮する。

つつしまる
慎。謹(自動四段)　つゝしむに同じ。(續紀宣命)

つつしみ
慎。謹(名)　慎む事。●謹慎。

つね
常(名)　〔一〕通常。●通例。●常式。●平生。〔二〕永久に變化なき事。●常住不滅。○萬葉「つねにもがもな常少女にて」

つねに
常(副)　何時も。●不斷。●平生。●常々。

つねづね
常常(副)　常に。●何時も。●不斷。●平生。

つねならず
(句)　常なしに同じ。

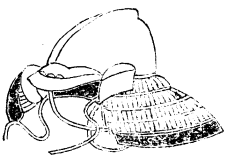
つねなし
常無(形。形狀言ク活)　人世の定めなきを云

ふ。●人世の變化し易きを云ふ。○萬葉「世の中を常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見れば」

つな 綱(名) 〔一〕太き繩。〔二〕上古の建築にて柱、桁など結び合せたる綱。おもに葛を用ふ。

づなり 頭成(名) 兜の一種。頭の形に作りたるもの。

【圖】



つなぬく (他動四段) 貫く。●つきとほす。●刺し通す。○謠曲「太刀をくはへつゝ。逆さまに落ちて。つなぬかれ失せにけり」

つなぬき (名) つらぬきに同じ。皮にて造りたる軍陣用の沓。

つなわたし 綱渡(名) 船渡の一法。瀨の早くして棹の利かぬ河に。岸より岸に綱を張り。之に繼りて船を進むるやうにしたるもの。

つながね 綱長井(名) 釣瓶繩の長き井戸。●車井戸。

つなね 綱根(名) 古代の建築にて柱などを結び合せたる綱の根本。●綱。○紀「築き立つる新室綱根」

つなむ 嗜(他動四段) たしむ。●たしなむ。(紀)

つなぐ 繋(他動四段) 彼物と此物とを結び附くる。●彼物に此物を結びて留むる。●連續さする。

つなで 綱手(名) 綱。●船を引く綱。○土佐「ひく舟の綱手の長き春の日を」

つなでなはッ 綱手繩(名) 綱手に同じ。

つなでぶね 綱手船(名) 引綱を附けたる舟。(雅)

つなぎ 繋(名) 〔一〕繋ぐ事。〔二〕物と物との間を繋ぐための物。

つなみ 津波。海嘯(名) 陸地を浸す非常の大波。●高潮。

つなし (名) 魚の名。このしろの小さきもの。(萬葉)

つなしにくし (形。形狀言ク活) つらにくし。●つれなし。○源氏「鬚がちにつなしにくき顏を」

つなびく 綱引(他動四段) 綱にて引動かす。○源氏「御簾のつまを猫のつなびきたりし夕の事も」

つなびく 綱引(自動四段) 〔一〕綱を引く。○蜻蛉「つなびく駒」〔二〕引張り合ふ。●負けじ劣らじと挑み合ふ。○源氏「しか改めんともいはずいたくつなびきて見せし間に」

つら 面(名) 〔一〕顔。●面。〔二〕頬。(紀)〔三〕表面。

つら 列。連(名) ならび。●れつ。●連中。

つらにくし (形。形狀言ク活) 其顔までも憎きほどに其人の憎き。

つらぬ 列(他動下二段) 並ぶる。●陳列する。

つらぬく 貫(他動四段) 物の全部を突き通す。●刺し通す。

つらぬき 貫(名) 皮にて造りたる軍陣用の沓。

つらを 弦緒(名) 弓の弦糸。(萬葉)

つらだましひ 面魂(名) 精神を表に顯はしたる顔色。

つらつら 熟(副) つくづく。●よくよく。(又)ーつらつらに。(又)ーつらつらと。

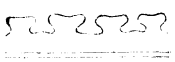
つらつくり (名) 顔付。●顔色。●おもゝち。

つらづゑ (名) 頬杖に同じ。……人待つ時または物思ある時にする事。○竹取「物ゝ言はでつらづゑをつきて」

つらつき (名) 顔付。●顔色。●おもゝち。

つらねうた 連歌(名) れんがに同じ。

つらねやまみち 連山道(名) 鎧の札の一種。



つらなる 列、連(自動四段) 列をなして並ぶ。●續く。

つらなむ (他動下二段) 連ね並ぶる。○萬葉「ふせの海に小船つらなめ」

つらら (名) 〔一〕雅言にては氷に同じ。○千載「つらゝぬてみがける影の見ゆるかな誠に今や玉川の水」〔二〕俗言にては軒などに垂れ下りたる氷。雅言にて垂氷といふもの。

つららかに (副) つれなく。●知らぬ顔して。(大鏡)

つらし (形。形狀言ク活) 〔一〕つれなし。●うらめし。●無情な。(雅)〔二〕苦し。●悲し。

つむ 紡錘(名) 絲を紡ぐに用ふる具。針に似て太く長きもの。

つむ 摘(他動四段) 指の爪先にて折り取る。

つむ 積(他動四段) 高く重ねる。●車船などの上に載せる。

つむ 積(自動四段) つもる。●重なり高まる。

つむ 詰(自動四段) 塡所の無いほど狹まる。●つまる。

つむ 詰(他動下二段) 狹むる。●縮むる。●短くする。●極端に物事を爲す。

つむ 詰(自動下二段) 役所に出勤して居る。

つむ (他動四段) 向齒にて嚙む。○枕「椎つみたる」

つむ (他動四段) つまむ。●つめる。

つんぼ 聾(名) 耳の聞こえぬ事。●耳の聞こえぬ人。

つむり (名) 頭に同じ。●つぶり。●あたま。

つむがり (名) 鋭き太刀。(記)

つむれ 培壤(名) 田の中などにて土の盛り上りて高くなりたる處。(和名抄)

つむぐ 紡(他動四段) 糸車を用ひて綿を糸に造る。

つんざく 擘(他動四段) 突き裂く。●裂く。

つむぎ 紬(名) 織物の名。眞綿を紡ぎて織りたる絹布。

つむじ 旋毛(名) 〔一〕渦を卷きて生じたる髪の毛。〔二〕其髪の毛の生えたる所。

つむじ (名) つむじかぜの略。

つむじかぜ 旋風(名) 渦の如く吹きて旋る風。●つじかぜ。

つう 通(名) 〔一〕文書を敷ふる詞。○「正副二通の願書」〔二〕通力。●神通。〔三〕其物を熟知して居る事。○「料理通」

つうべん 通辯(名) 外國人と談話する時その中に立ちて双方に譯し傳ふる事。又は其人。●通事。

つうち 通知(名) 知らする事。●報知。△(動)—通知す。

つうりき 通力(名) 神通力に同じ。

つうおん 通音(名) 語學上にて同行又は同列に音の相通ずる事。……「ふなうたはふねうたの通音なり」さいふの類。

つうがく 通學(名) 通ひて學問する事。△(動)—通學す。

つうよう 通用(名) 世間一般に用ふる事。△(動)—通用す。

つうれい 通例(名) 普通。●通常。

つうぞく 通俗(名) 世俗一般に通ずる事。△(形)—通俗なる。(又)—通俗の。(副)—通俗に。

つうらん 通覽(名) 一通り見る事。△(動)—通覽す。

つうく 痛苦(名) 痛み苦しむ事。

つうくわ 通貨(名) 通用の貨幣。

つうふう 通過(名) 通り過ぐる事。△(動)—通過す。

つうご 痛風(名) 病の名。痛痲質斯の類。

つうか 通語(名) 通用の言語。

つうぎ 通行(名) 通る事。●往來。△(動)—通行す。

つうきん 通義(名) 普通の筋道。普通の意味。

通勤(名) 通ひて勤務する事。●通ひ勤め。△(動)—通勤す。

つうじ 通事(名) 通辯。

つうじ 通(名) 〔一〕通ずる事。〔二〕大小便の排泄。● 便通。

つうしょう 通稱(名) 普通の名稱。● 俗名。

つうしゃうう 通商(名) 外國と交通して營む商業。

つうじゃうう 通常(名) なみ〳〵の事。● 普通。● 通例。(形)—通常なる。(又)—通常の。(副)—通常に。

つうしん 通信(名) 音信を通ずる事。● おとづれ。△(動)—通信す。

つうじん 通人(名) 社會の事情に通じたる人。● 粹人。

つうず 通(他動サ變) 〔一〕通ぜしむる。〔二〕通知する。● 内通する。

つうず 通(自動サ變) 〔一〕通ふに同じ。〔二〕達する。● 熟する。● 譯が分る。〔三〕密通する。

つの 角(名) 〔一〕牛、鹿などの頭に尖りて生えたる骨質の物。〔二〕すべて角に似て尖く角立ちたるもの。

つのはず 角筈(名) 伊勢齋宮の忌詞。優婆塞を云ふ。

つのり 募(名) 募る事。● 募集。

つのる 募(他動四段) 公けに呼び集むる。

つのる (自動四段) 增長する。

つのがみ 角髮(名) 童男の髮の名。—總角に同じ。

つのだる 角樽(名) 角の如き柄の聳えたる樽。

つのだらひ 角盥(名) 左右に二本づゝの角ある耳盥。

つのぐむ 角組(名) 葦、菰などの芽を出だすを云ふ。○後拾遺「三島江や角ぐみわたる葦の根の一夜の程に春めきにけり」

つのまた (名) 海草の名。糊に用ふるもの。

つのふで 角筆(名) 角にて作りたる字突。昔し漢籍の素讀を習ふ時に用ひたるもの。

つのぎ 角木(名) つのぎわりの畧。

つのぎわり 角木割(名) 〔一〕角にて木割を作れる矢。……木割は樫、櫟などにて廻り四寸長さ六寸ばかりにこしらへ矢の根にはめて敵の船ばた楯板などを射割るもの。(盛衰)〔二〕卷藁矢の一名。

つのゆみ 角弓(名) 角にて弭を作りたる弓。(和名抄)

つく 木菟(名) 鳥の名。みゝづく。(和名抄)

つく 鈌(名) 弓の握の上に打つ折釘。(保元)

つく (名) 家の垂木を云ふにや。○竹取「屋の棟のつくの穴ごとに」

つく 月(名) つきの轉。○萬葉東歌「うらぬの山につくかたよるも」

つく 附。着(自動四段) よる。●一つになる。●くっつく。●ひっつく。●附着する。●從ふ。●附屬する。●添ふ。

つく 附。着(他動下二段) 附かしむる。

つく 着(自動四段) 〔一〕到りとまる。●達する。〔二〕其席に座する。

つく 即(自動四段) 位に立つ。

つく 即(他動下二段) 即かしむる。

つく 附(他動下二段) 記す。

つく 漬(自動四段) 〔一〕水に浸る。〔二〕漬物の出來あがる。

つく 漬(他動下二段) 〔一〕水に浸す。〔二〕漬物を作る。

つく 盡(自動上二段) 無くなる。●滅する。●果つる。●消ゆる。●終る。

つく 突。衝(他動四段) 〔一〕急に物に打ち當つる。〔二〕戰にて急に打ち入る。●突擊する。

つく 撞(他動四段) 撞木にて釣鐘を鳴らす。

つく 築(他動四段) きづくに同じ。

つく 舂。搗(他動四段) 杵にて打ち叩く。○「米を舂く」「餅を搗く」

つく 吐(他動四段) 吐き出だす。

つぐ 告(他動下二段) 言ひ知らする。●通告する。

つぐ 次(自動四段) 其下に續く。●其次にあたる。

つぐ 注(他動四段) 水酒などの類を流し入るゝ。

つぐ 繼(他動四段) 續かしむる。●附着させる。●相續する。

つくいも (名) つくねいもに同じ。

つくろひ 繕(名) 繕ふ事。●修繕。

つくろふ 繕(他動四段) 〔一〕破れたる所など補ひ直す。●修繕する。〔二〕辯護する。

つくばね 突羽根(名) 羽根に同じ。

つくばふ (自動四段) うづくまる。●這ひ屈む。

つくばのみち 筑波道(名) 連歌の道。◎古へ日本武尊の甲斐におはしける時「にひばり筑波を過ぎて幾夜か寢つる」といふ歌句を仰せられしに御火取の翁ありて「かゞなべて夜には九夜日には十日を」と末を附けまゐらせし贈答を以て連歌の起原と立てたる故の名。

つくばやま 筑波山(名) 風俗歌の曲名。

つくばほう 突棒(名) 德川時代番所などに備へ置きて人

を捕縛するに用ひたる武器。長き柄の先に尖りたる疣多き撞木の如き物を着けたり。〔圖〕

つくり 傍(名) 漢字の右方の部分。……「松のつくりは公の字」などいふ類。

つくり 作。造(名) 〔一〕作る事。又は作り上げたる有樣。●構造。●製作。●摸造。●裝束。

つくりばな 造花(名) 紙、切地などにて造りたる花。

つくりばなし 作話(名) 〔一〕眞實ならぬ話。●虛談。〔二〕小說。

つくりおや 作親(名) 養父母。(狹衣)

つくりかはヅ 革(名) なめしがは。(和名抄)

つくりかへユ 作替(名) 作り直す事。●改造。●改作。

つくりごと 作言(名) 作りたる言語。●虛言。●僞り。

つくりごと 作事(名) 眞實ならぬ事。●僞り。

つくりごゑ 作聲(名) わざと粧ひて發する聲。

つくりゑ 作繪(名) 彩色畫。(源氏)

つくりえだ 作枝(名) 造花の枝。(伊勢)

つくりみづ 作水(名) 一度沸かして冷やしたる水。●湯ざまし。(和名抄)

つくりびと 作人(名) 作者。●筆者。(枕)

つくりもの 作物(名) 〔一〕作りたるもの。●人造物。〔二〕能樂にて舞臺に用ふる樹木、山などの道具立。

つくる 作。造(他動四段) 〔一〕なす。●でかす。●こしらへる。●構造する。●組立つる。〔二〕似する。●擬する。●僞る。●僞作する。〔三〕裝ふ。●裝飾する。

つくよ 月夜(名) つきよに同じ。○「夕づくよ」「曉づくよ」

つくよみ 月讀(名) 月界を主どる神。(記)

つくだ 佃(名) 作り田の意。◎耕地。●田地。(和名抄)

つくだに 佃煮(名) 食品の名。小魚、貝、牛肉など生醬油にて煮染めたるもの。

つくだし (名) つきたちに同じ。(萬葉東歌)

つくつくぼうし (名) 秋の初に鳴く一種の蟬。其聲ツクツクボウシとも聞ゆ。ガガシイツクツクとも聞こゆ。和歌にてはウツクジョシと聞きなしてよめり。

つくづく (副) 心に深く感ずる有樣。●つら〳〵。(又)—つくづくと。

つくづくし 土筆(名) 草の名。筆の如き形して春の野に生ずるもの。●つくし。

つくねいも (名) 薯の一種。其形の不規則にして石塊などつくねたる樣なるもの。

つくねんと (副) ぼんやりと。●ぼかんと。

つぐなふ 償(他動四段) つぐのふに同じ。

つぐら (名) 藁にて組みたる莚。山里などにて敷くもの。●ねこだ。●ねこがき。○夫木「山賤のつぐらにゐたる我なれや心せばきを嘆くと思へば」

つぐむ 鉗(他動四段) 口を塞ぐ。●だまる。●默する。

つぐのひ 償(名) 償ふ事。●償金。●償品。

つぐのふ 償(他動四段) 代りに物を與ふる。●償却する。●罰に物を出す。

つくまのかみ 筑摩神(名) つくままつりを見よ。○後拾遺「おぼつかな筑摩の神のためならば幾つか鍋の數はいるべき」

つくまのなべ 筑摩鍋(名) つくままつりを見よ。

つくまのまつり 筑摩祭(名) つくままつりに同じ。○伊勢「近江なる筑摩の祭とくせなんつれなき人の鍋の數見ん」

つくままつり 筑摩祭(名) 近江の國栗本郡筑摩神社の祭禮。四月一日に行はれたり。此日土地の女ども夫を持ちたる度數に合はせて鍋を被り神輿に隨行するを習とす。故に鍋祭ともいふ。

つくゑ 机(名) 〔一〕古は食器を載する臺。●食卓。〔二〕今は讀書執筆などする時に用ふる臺。●文机。

つくゆみ 鈬弓(名) 鈬打ちたる弓。

つくゆみ (名) つくよみに同じ。

つぐみ 鶫(名) 鳥の名。形百舌に似て大きく灰色なるもの。

つくし 土筆(名) 草の名。つくづくしに同じ。

つくし 盡(名) 他の名詞に添へて用ふる詞。其物悉皆。○「國つくし」「魚つくし」

つくしまひ 筑紫舞(名) 上古雅樂寮の舞樂の曲名。(續紀)

つくしぶね 筑紫船(名) 筑紫の船。(後拾遺)

つくしごと 筑紫琴(名) 箏の一名。

つくも (名) 藻の種類の水草。(和名抄)

つくもがみ (名) つくもに似て亂れそゝけたる老人

つくもどころ　の髮。（伊勢）

作物所（名）　古代禁中に置かれたる金銀細工の製作所。

つくもんどころ　作物所（名）　つくもどころに同じ。

つくす　盡（他動四段）　〔一〕盡きさする。〔二〕出來得る限りを爲す。

つや　邸屋（名）　問屋。（和名抄）

つや　通夜（名）　〔一〕寺に籠りて終夜祈願する事。〔二〕死者を葬る前に人々集まりて終夜之を守る事。

つや　艶（名）　美しき光り。●光澤。

つやつや　（名）　艶のある絹。（榮花）

つやつや　（副）　少しも。●一切。○盛衰「つやつや物も覺えず」（又）ーつやつやと。○著聞「つやつやと知らずして」

つやつや　（副）　艶のある有樣。（又）ーつやつやと。

つやつやし　（形。形狀言シク活）　艶のある有樣。

つややか　艶のある有樣。△（形）ーつやつやかなる。（副）ーつやつやかに。

つやめく　（自動四段）　つやつやしくある。●つややかに見ゆる。（枕）

つま　妻（名）　〔一〕夫に連れ添ふ女。●さい。●め。●女房。〔二〕妻に連れ添ふ男。●夫。●良人。

つま　褄（名）　衣服の名所。おくみの下の端。

つま　（名）　〔一〕端。●緣。○「簾のつま」「扇のつま」「軒のつま」〔二〕端緒。●緣。●種。●誘引。○長明集「霰ふる葦のまろやの板庇寒覺もよほすつまにうありける」〔三〕料理の詞。刺身などのあしらひ。

つま　爪（形）　爪の。●爪にてするところの。

つまはじき　爪彈（名）　爪にて外に彈き出すの意。憎み、嫌ひ、恨む時などにする事。○源氏「つまはじきをしつゝ恨み給ふ」

つまにほひ　妻匂（名）　鎧の名。緣は色濃くして段々ぼかしにしたるもの。

つまど　妻戸（名）　兩開きの戸。

つまどひ　妻訪（名）　〔一〕夫婦相遇ふ事。〔二〕結婚を求むる事。〔三〕夫婦相戀ひて呼びかはす事。……（雜）

つまどふ　妻訪（自動四段）　〔一〕夫婦相遇ふ。〔二〕結婚を求むる。〔三〕夫婦相戀ひて呼びかはす。●妻呼ぶ。●妻戀ふる。○玉葉「淡路島瀨

戸の汐風寒からし妻ごふ千鳥聲しきるなり」

つまり

（副）　到底。●結局。

つまる

詰（自動四段）　極まる。●窮する。●狹まる。●行きあたる。

つまおと

爪音（名）　〔一〕琴を彈く爪の音。〔二〕馬の蹄の音。○賴政集「木の葉ちる山路の石ば見えねども猶あらばるゝ駒のつまおと」

つまをりがさ

妻折傘（名）　傘の一種。骨の先を内へ折り入れ白紙にて張りたるもの。昔し公卿大名等の行列には之を携へしめたり。

つまがけ

爪掛（名）　革などにて造り足駄の爪先にかけて泥を防ぐもの。

つまより

（名）　つまよる事。（宇治）

つまよる

（他動四段）　〔一〕つまやるに同じ。○宇治「簾の内に矢をつまよる音のしけるが」〔二〕弓の弦をつまみて引き鳴らす。●弦打をする。○萬葉「梓弓つまよる音の」

つまよぶ

妻呼（名）　妻を戀ひて呼び立つる。○「妻よぶ鹿」「蛙妻よぶ」

つまたつ

爪立（他動下二段）　足の爪先にて立ち上る。

つまづく

躓（自動四段）　歩む時に爪先の物に突き當る。●物に妨げられて進みの止まる。

つまづま

（名）　端々。○「直衣のつまづま」（雅）

つまづき

躓（名）　つまづく事。

つまね

爪根（名）　鳥につかまれて其爪の下になりたるところ。○後京極殿三百首「鷹の取るこぶしの内のぬくめ鳥氷る爪根のなさけをぞ知る」

つまなし

妻梨（名）　梨の一種。

つまらぬ

（形）　面白からぬ。●くだらぬ。●役に立たぬ。

つまむ

摘（他動四段）　指の先に支へて物を取る。

つまぐろ

妻黑（名）　先の方の黑き矢の羽。

つまぐる

爪繰（他動四段）　珠數など爪先にて繰る。

つまくれなゐ

爪紅（名）　〔一〕緣を紅に染めたるもの。〔二〕緣を紅に染めたる扇。

つまやる

爪遣（他動四段）　矢のゆがみなど調ぶるために左の手の爪の上に載せ右の手にてひねりながら先へ突きやる事。○盛衰「與一は宗長が矢を取りてさらり〳〵とつまやりて」

つまやしろ

妻社（名）　小さき祠。○夫木「草深き野中

の杜のつまやしろこや花すゝき穂に出づる神」

つまま（名）　木の名。萬葉集、新撰六帖などの歌によみたれど實物は詳ならず。

つまこひ（名）　夫または妻を戀ふる事。○萬葉、春の野にあさるきゞすの妻戀におのがありかを人に知れつゝ」

つまごと　妻琴（名）　琴に同じ。◎常に身近く置きて妻の如く親しみ馴らすの意。（雅）

つまごろも　爪聲（名）　人に物を言はせてそれに添へて言ふこと。（源氏）

つまで　孀手（名）　粗く挽き割りたる木材。（萬葉）

つまさき　爪先（名）　足の指の先。

つまさきあがり　爪先上（名）　坂路の漸々登りにかゝる事。

つまぎ　妻木（名）　枝折りの薪。（雅）

つまみ　撮（名）　〔一〕撮む事。〔二〕撮む爲に付けたる器物の取手。

つまみな　撮菜（名）　菜の芽生。

つまし（形。形狀言クシ活）　つゞまやかなる有樣。●儉約なる有樣。

つまじろ　妻白（名）　先の方の白き矢の羽。

つまじるし　爪印（名）　書物の中に心おぼえの爲め爪にて付けたる目印。……今ならば不審紙を張るところ。●心おぼえ。

つまびらか　審。詳（名）　委しき事。●明細。●詳細。●委細。●明白。△（形）—審なる。（副）—審に。

つまびき（名）　〔一〕爪にて弓の弦を引き鳴らす事。●弦打。（萬葉）〔二〕爪にて琴を彈く事。（源氏）

つまもと　爪本（名）　爪の根本。○空穗「つまもとより血をさしあやして」

つげ　黄楊（名）　木の名。葉細かく材は堅くして櫛、枕等種々の器物を作るに適するもの。

つげ　告（名）　告ぐる事。●神佛の夢などに現はれて告ぐる事。●託宣。

つけどころ　附屈（名）　定例の贈物。

つけたり　附（名）　附け加へ。●附屬。

つけな　漬菜（名）　鹽漬にする料の野菜。

つげぐち　告口（名）　他の過失などを密に告ぐる事。

つげぐし　黄楊櫛（名）　黄楊にて作れる櫛。

つけぐすり　附藥（名）　皮膚に塗り附けて用ふる藥。●

外用藥。

つけやきば 附燒刃(名) 入智惠。

つけまくら 黄楊枕(名) 黄楊にて作れる枕。

つけぶみ 附文(名) 艶書を送る事。又その艶書。

つけこむ 附込(自動四段) 機に乘ずる。

つけあひイ 附合(名) 俳諧の一名。◎上の句下の句と互に付け合ひ續くる故。

つけあはせ 附合(名) 料理の詞。同じ皿に盛りて配合さする事。又は其物。

つけぎ 附木(名) 火を打ち附け又は摺り附くる時に用ふるもの。薄く削りたる木の端に硫黄を塗りたるもあり。又はマッチの事をも云ふ。

つけび 附火(名) 人の家に火を附くる事。●放火。

つけひも 附紐(名) 小兒の衣類に附けたる帶の下の紐。

つけもの 漬物(名) 鹽漬、澤庵漬、酢漬、糟漬、味噌漬などにしたる野菜。

つけもの 附物(名) 催馬樂朗詠などを謠ふ時助音する樂器の稱。

つぶ 粒(名) 〔一〕米、麥、數珠などの如く小さき丸き物の一個。〔二〕粒銀の畧。

つぶと (副) 押し付けられたる有樣。●ひしと。●ぴたりと。○大鏡「陸奥紙をつぶと(壁に)押させ給へりけるが」

つぶと (副) 水に入る音。●どんぶりと。●ざんぶと。(發心集)

つぶり 鷸子(名) 鳥の名。鷿の類。(和名抄)

つぶり (名) つむりに同じ。●あたま。●頭。

つぶりと (名) 水に入る音。●どんぶりと。●ざんぶと。○大和「此平張は川に臨みてしたりければつぶりと落ち入りぬ」

つぶる 潰(自動下二段) 物事の破れ損はるゝ。●へしやがれて損ずる。……驚などの烈しき時。

つぶる 瞑(他動四段) 眼を閉づる。●瞑目する。

つぶつぶと (副) 〔一〕つぶさに。●つくづくと。●一粒づゝ。●一つ一つ細かに。○源氏「つぶつぶと言ひつゞけ」〔二〕粒立ちたる物のこぼるゝ有樣。○空穗「涙をつぶつぶと落して」〔三〕肉の肥ねたる有樣。●ぶてぶてと。●腹などの膨れたる有樣……立腹にも云ふ。○源氏「つぶつぶと肥ねて白う美し」

同「御胸つぶ〳〵となる心地す」〔四〕水に入る音。●つぶりと。○吉野拾遺「つぶ〳〵と水の底に沈みけり」

つぶね (名) 奴僕。●下部。●下男。(撰集抄)

つぶなき 蹂(名) 足のくるぶし。●かゝと。(和名抄)

つぶらに (副) つぶらかに同じ。△(形)—つぶらなる。

つぶらはゞし (形。形狀言シク活) 胸の潰るゝ有樣。○源氏「御帳のめぐりにも人々しげく並み居たればいと胸つぶらはしくおぼさる」

つぶらかに (副) 丸く。●まる〳〵と。●つぶ〳〵と。○空穗「つぶらかに白く肥ゑ給へり」△(形)—つぶらかなる。

つぶらかし (形。形狀言シク活) つぶらはしに同じ。○空穗「胸つぶらかしき事を聞き給ひて」

つぶやく 咬(自動四段) 小聲にて獨語する。●ふつふつ言ふ。●小言をいふ。

つぶぶし 蹂(名) つぶなきに同じ。(和名抄)

つぶて 礫(名) 物を打つために投ぐる小石。

つぶさに 具(副) つまびらかに。△(形)—具なる。

つぶぎん 粒銀(名) 德川時代の貨幣の一つ。粒の如く丸き銀貨。●豆銀。

つぶし 潰(名) 金屬製の器物など潰して地金とする事。又其物。

つぶす 潰(他動四段) 潰れしむる。●破り毀つ。

つがふ 都合(名) 手順。●手筈。●勝手。●機會。

つかうまつる (他動四段) 貴人に對して云ふ詞。●爲し奉る。●行ひ奉る。○「御供つかうまつる」「御祭つかうまつる」

つごもり 晦(名) 月の籠り隱れて見ねすなるの意。◎〔一〕太陰曆にて月の二十日以後の稱。●下旬。○古今「彌生のつごもりがたに」〔二〕月の最終の日。……太陽曆にては二十九日または三十日。太陽曆にては三十日または三十一日。〔三〕特には十二月三十一日。

つごもりそば 晦蕎麥(名) 十二月晦日に祝として食ふ蕎麥。此日食すれば身富むとてする事。

つゑ 杖(名) 〔一〕歩行を助くる爲に携ふる棒。〔二〕すべて杖の如く物を支ふる棒。〔三〕神樂の曲名。〔四〕刑罰の具。杖罪にあたる人を叩くもの。〔五〕古代の尺度の稱。丈に同じ。十尺の長さ。

つゑたらず (枕) 一丈に足らぬ八尺の意にて續けたる

つて

傳(名)　傳へ。●たより。●言づて。●傳言。●人づて。●人のたより。●人の噂。○源氏「つてに承れば」千載「立田山麓の里は遠けれど嵐のつてに紅葉をぞ見る」

枕詞。○萬葉「つゑたらすやさかの嘆き」

つて

傳(他動)　傳へといふに同じ。……但しつゝつゝるつゝれなどは活用せず。○玉葉「誰かはつてん」續後撰「空につてまし」源氏「つてなん」順集「香をのみつてよ」

つてごと

傳言(名)　ことづけ。●でんごん。●人の噂。(萬葉)

づあん

圖案(名)　圖面の趣向。●圖取の下書。

づざい

徒罪(名)　刑罰の名。……徒を見よ。

づざん

杜撰(名)　不調べ。●粗漏。△(形)—杜撰なる。(副)—杜撰に。

つき

月(名)　(一)夜の空に太陽の如き光を放つもの。すなはち我地球の衛星にして廿七日餘に地球を一周する最大の星。(二)一年の日數を十二に分ちたる其一つ。一月二月三月四月の類。(三)月經。●めぐり。

つき

坏(名)　食物飲物など盛る器。高坏酒坏の類。

つき

槻(名)　木の名。けやきの種類。

つき

桃花鳥(名)　鶺鴒の古名。(和名抄)

つき

附(名)　(一)附く事。●附く物。(二)他の名詞に添へて其樣子を示す詞。○「鼻つき」「口つき」「腰つき」

つき

調(名)　てうに同じ。みつぎ。

つぎ

繼(名)　(一)繼ぐ事。(二)跡繼。●繼續者。(三)物の破れを補ふ事。又之を補ふ料の物。

つぎ

次(名)　第二番目。●其後。●其翌。

つきばな

(名)　鼻水を垂らす事。●鼻水。(枕)

つぎばし

繼橋(名)　間にて板または石を繼ぎ替へたる橋。

つぎはず

繼筈(名)　弦の竹にて造りて箭めたる矢筈。

つぎほ

接穗(名)　(一)接木に用ふる小枝。(二)接木に同じ。

つきぢ

築地(名)　海などを埋めて築きたる土堤。●埋地。

つきぬの

調布(名)　調として奉る布。

つきかはつす

(自動四段)　つきじろふに同じ。(源氏)

つきがた

月形(名)　三日月の如き形。●弦月形。

つきがね

撞鐘(名)　釣鐘に同じ。

つきかげ 月影(名) 月の光り。

つきかへす 吐返(他動四段) 吐きもどす。●嘔吐する。(とりかへばや)

つきがみしも 繼上下(名) 德川時代の士人略式の禮服。平袴の上に肩衣を掛くるを云ふ。

つきがしら 月頭(名) 月初め。●初旬。(謠曲)

つきよ 月夜(名) 月の出でたる夜。

つきよみ 月讀(名) つくよみに同じ。

つきよみをぶこ 月讀男(名) 月界を主どる神。(萬葉)

つきたち 朔日(名) ついたちに同じ。

つきそひ 附添(名) 附添ふ事。又は其人。

つきそで 突袖(名) 歩む時に袂に手を入れて突張るを云ふ。昔と士人のせし事。

つぎつぎ 次々(名) 其下々。●其あとへ。

つぎつぎに (副) 次々に次ぐ。●續ぎ續に。●引續きて。

つきづきし (形。形狀言シク活) 似合はし。●相應な。●適當な。○枕「人の家につきづきしき物。庖云々」

つぎねふ (枕) 山城の枕詞。その掛かる意味は古來諸說あれど附會に過ぎず。○記「つぎねふ山城川を」

つきならび 月並(名) つきなみに同じ。(榮花)

つきなみ 月並。月次(名) 毎月。●連月。

つきなみのまつり 月次祭(名) 新年祭(そしさのまつり)に預かりたる神々に其豐作を守り給ふ事を報謝するための官祭。六月十二月の十一日禁中にて行はる。◎六月十二月の兩度とせしは毎月行はるべきを代表したるものなれば月次の名あり。

つきなみのびやうぶ 月次屏風(名) 屏風一雙(十二疊折)に正月より十二月までの年中行事を畫がき各その和歌を添へたるもの。中古は總べて祝賀の席に之を建てたるものにて人からも之を贈物とせり。

つきなし (形。形狀言ク活) 似合はしからず。●不適當な。●不都合な。○竹取「親君と申すともかくつきなき事をのたまふ事と事ゆかぬものゆゑ大納言をそしりあひたり」

つきむ (自動四段) 強ひて辭する。●拒む。○著聞「太政大臣の家におもなくといふ鴨のありけるを家隆卿所望せられたるを大臣しばしつき

み給ひければ」

づきん 頭巾(名) 寒氣を防ぐ爲め頭に被るもの。

つきうす 搗臼(名) 杵にて舂く臼。……磨碓(ひきうす)などに對していふ。

つきのわ 月輪(名) 〔一〕滿月の如き形。〔二〕袈裟に着くる象牙の輪。〔三〕僧の行ふ悟道の一法。月輪觀の譯語。○後拾遺「月の輪に心をかけし夕より萬の事を夢と見るかな」〔四〕熊の喉に月の如き形を爲したる白き毛。○夫木「奥山に住む荒熊の月の輪に夜目こそいとゞ曇らざるらめ」

つきのねずみ 月鼠(名) 過ぎ行く月日を云ふ佛教上の譬喩。寶頭盧說法經に曰く「人あり曠野を行くとき象の爲めに追はれ井の中に入りぬ。井に藏れんとすれば四毒蛇ありて其身を螫さんとす。樹に上らんとすれば二鼠藤を咬むに逢ふ」と。四蛇は春夏秋冬四季の喩へ。二鼠は過ぎ行く月と日との喩へ。すなはち人生の恐るべく厭ふへく極めてはかなきの意味。○久安六年百首「のごけかれ月の鼠よ露の身をやどす草葉の程もなき世に」月清集「後の世に攝陀の利生を被らずばあなあさましの月の鼠や」

つきのえん 月宴(名) 月見の宴會。(榮花)

つきのでしほ (名) 〔一〕月の出づる時刻。○玉葉「紀の國や由良の湊に風立ちて月のでしほの雲拂ふなり」〔二〕月の出にさす潮。○新古今「難波がた月のでしほのさすままに夜なく田鶴の聲ぞかなしき」

つきのさはり 月障(名) 月經。

つきのみやこ 月都(名) 〔一〕月の世界にある都。●月宮殿。○長秋詠藻「白妙の砂蒔き敷く天の川月の都のみ雪なるらし」〔二〕之に擬して京都を云ふ。○謠曲「かゝるためしも有明の。月の都を振り捨てゝ」

つきのもの 月物(名) 月經。

つきくさ 月草(名) 〔一〕草の名。花の形螢の羽を展げたるが如く青色にて夏秋の頃咲くもの。昔し染料の花田の色は此花より製したるが特にきめやすき色なれば常にうつろふなどいふ緣に言ひ習はしたり。●異名は……露草。●うつしばな。●螢草。●かまつか。〔二〕

つきくさの 衣の重の色目。表裏共に花田。

月草の(枕) 〔一〕月草の花の色は物に移りつき易きが故にうつしうつろふなどの枕詞とす。○萬葉「月草のうつし心は」同「月草のうつろひやすく」〔二〕褪み易きものゆゑ假なる命の枕詞とす。(萬葉)

つきや 春屋(名) 米を春くを業とする家。又は其人。●米舂。

つきやく 月役(名) 月經。●めぐり。

つきやま 築山(名) 庭に築きたる山。

つきまち 月待(名) 〔一〕月の出を待つ事。……多く陰曆の二十六夜に云ふ。〔二〕月の祭。

つぎまつ 續松(名) ついまつ。●松明。(雅)

つきまつをんな 月待女(名) 古代物語の名。但し世に傳にらず。

つきげ 月毛。桃花毛(名) 馬の毛色の名。少し赤みを帶びたる白色。

つぎぶみ 繼文(名) 系圖の古名。

つきごろ 月頃(副) 二三ヶ月此方。

つきごもり 晦(名) つごもりを見よ。(靈異記)

つきあひ 付合(名) 付き合ふ事。●交際。

つきあひ 附合(自動四段) 交はる。●交際する。

つきあふ 衝合(自動四段) 双方より相衝く。●衝突する。

つぎき 接木(名) 一の木を臺として他の木の小枝を接ぎ合はせ育たしむる事。●接穂。

つぎぎり (名) 色艷も曲折もなき事。●お世辭も愛嬌もなき事。(源氏)

つきゆみ 槻弓(名) 槻の丸木にて造りたる弓。

つぎめ 繼目(名) 繼ぎ合はせたる部分。

つきみ 月見(名) 月を見て酒宴など開く事。世俗八月十五夜九月十三夜などにする事。

つきみづき 月見月(名) 八月の異名。

つきみずづき (名) 五月雨にて月を見ぬ事多き故◎五月の異名。

つきごしろ 月代(名) 〔一〕月の出でんとする空の先づ白くなる事。〔二〕さかやき。(撰集抄)

つきじろふ (自動四段) 膝など突っ突き合ふ。……其人の前にて二三人が内々嘲る時などにする事。●言はずに知らせる。●目色で知らせる。○源氏「つきじろひ目くばす」

つきしみ (名) 物のけ。●つきもの。(源氏)

つきひ　月日（名）　〔一〕太陽と太陰と。〔二〕年月の月と日夜の日と。●多くの時間。

つきひとをとこ　月人男（名）　〔一〕月界に住む神人。〔二〕月の異名。……（萬葉）

つきひがひィ　月日貝（名）　貝の名。帆立貝に似て丸くギザなく其殼の一面は赤く他の面は白きもの。

つきびたひィ　月額（名）　つきしろ。●さかやき。

つきもの　附物（名）　〔一〕其物に附き添ひて離るべからざるもの。●附屬物。○「牡丹に獅子は附物よ」〔二〕人に附きたる生靈、死靈、狐などの類。

つきす　（自動サ變）　盡くるに同じ。○源氏「何やかやとつきすまじかりけれど」

つゆ　露（名）　晴れたる夜草葉などに玉の如く置く水蒸氣の固まり。●雨、霧などの滴り。

つゆ　（名）　食品の汁氣。●すまし汁。

つゆ　（名）　狩衣、水干などの袖より垂れたる袖括の紐。

つゆ　梅雨（名）　〔一〕梅の實の黄ばむ頃の雨多き季候。すなはち六月十日より三十日間。〔二〕其頃に降る雨。●五月雨。

つゆ　（自動下二段）　熟して潰るゝ。

つゆ　露（副）　少しも。●夢にも。○榮花「つゆ御湯をだに聞しめさず」

つゆばかり　（副）　露ほど。●夢ほど。●少々にても。○六帖「露ばかりたのめおかなん言の葉の暫しもとまる命ありやと」

つゆちり　露塵（副）　露程も塵程も。●少しも。○謠曲「つゆちり何か惜しからん」

つゆの　露の（形）　〔一〕露の置きたる。●露けき。○「露のやどり」「露の曙」〔二〕露の如くはかなき。○「露の身」「露の世」「露の命」〔三〕露ほどの。●夢ほどの。●少しの。○枕「露のはえも見ねぬに」

つゆのうてな　露臺（名）　露臺の文字の譯語。禁中にありて屋根なき建物の名。○辨内侍日記「世の常の月も光やまさるらん四年の秋の露のうてなば」

つゆくさ　露草（名）　草の名。月草の一名。

つゆけし　（形。形狀言ク活）　露に濡れて濕りたる有樣。●しめっぽい。●じめ〳〵としたる。○源氏「指貫の裾露けゝに花の中にまじりて」

つゆしも
つゆじも　露霜(名)　露と霜と。
露霜(名)　秋の末頃より冬の初にかけて降る半ば霜となりたる露。○新千載「淺茅生の小野の篠原色つきて露霜さむみ鶉なくなり」

つゆじもの
露霜の(枕)　〔一〕露霜の如く置くと掛かる枕詞。○萬葉「うつせみの惜しき此世を。露霜の置きていにけん」〔二〕消ねやすきものなればけ(消えの約)又は過ぐに續けたる枕詞。○萬葉「露霜のけやすき我身」同「露霜の過ぎましにけれ」〔三〕其時候によりて秋の文字に續けたる枕詞。

つめ
爪(名)　〔一〕手足の指先に生ずる角質の物。〔二〕琴を彈く時に指先に箝むるもの。

つめ
詰(名)　〔一〕詰むる事。〔二〕橋の渡り詰めたるところ。●たもと。○萬葉「大橋のつめに家あらば」

つめいん
爪印(名)　指の先に墨を附けて捺印に代用する事。●拇印。

つめばら
爪腹(名)　自身の爪にて切腹する事。武家に行はれたる刑罰の名。

つめる
(他動四段)　他人の皮膚などを爪先にて捻る。●つねる。

つめがた
爪形(名)　〔一〕つめりたる爪の痕。〔二〕馬の蹄の痕。

つめだて
爪立(名)　模樣の名。琴の爪を立てたる形。〈圖〉

つめたし
(形。形狀言ク活)　爪の先の痛き程に寒氣を感ずる有樣。●手足の切るゝやうに寒き。

づめん
圖面(名)　畫圖。

つめくふ
爪食(自動四段)　自身の手の爪を嚙る。恥かしき時などにする事。○源氏「なま人わろくつめくはるれど」

つめしょ
詰所(名)　役所などに出勤して扣へ居る處。

つみ
罪(名)　〔一〕人倫の道に背きたる所業。●罪惡。〔二〕法律に觸るゝ所業。●犯罪。〔三〕宗教上の戒に背きたる所業。●罪業。〔四〕其人の意に背きたる所業。○枕「かう心に入れて思ひける事を違へたれば罪や得らん」

つみ
拓(名)　木の名。山桑。(和名抄)

つみ
紡錘(名)　紡錘の古名。

つみは 鐔(名) つばの古名。(和名抄)

つみほろぼし 罪滅(名) 罪を消滅さする事。(他動四段。又は下二段) 罪すに同じ。

つみなゝふ 摘草(名) 春の野に出でゝ草の芽生など摘み遊ぶ事。

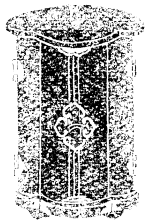
つみくさ (名) 芹の異名。

つみましぐさ 罪代(名) 罪ほろぼしの料。○空穂「其つみしろにはよろこびをしてよとの給ふ」

つみしろ 罪(他動サ變) 罪に處する。●つみなふ。●罰する。●處刑する。

つみす 辻(名) (一)道の十文字になりたる所。●四つ辻。(二)路傍。

つじ 厨子(名) (一)戸あり棚ある櫃。昔し書類また食器など入れたるもの。○源氏「集ども撰り出でゝこなたなるづしに積むべき事など」(二)兩開きにて丸形の箱。佛像を入るゝもの。(圖)



づし 辻番(名) (一)德川時代の詞。町の辻々に小屋掛して非常を警戒せし番人。(二)あんか(置巨燵の一種)の一名。◎辻番小屋にて用ひたる故とも云ふ。又其形が辻番小屋に似たる故とも云ふ。

つじばんごや 辻番小屋(名) 辻番の詰所。

つじばんしょ 辻番所(名) 辻番の詰所。

つじだう 辻堂(名) 路傍にある佛堂。

つじがはな 辻花(名) (一)古代裝束などの模樣。(躑躅が花の形したるもの。(圖)(二)紅染の帷子。幼女などの夏着るもの。

つじかぜ 旋風(名) つむじかぜに同じ。

づしょ 圖書(名) (一)書籍の總稱。(二)圖書寮の略。

づしょれう 圖書寮(名) 朝廷の圖書佛像筆墨紙等の事を掌る役所。官吏は頭、助、允、屬あり。●

つじだま 蕘花(名) 草の名。すゝだまの古名。(和名抄)

つじむ (自動四段) 黑き班點の附きてある。○今昔「袴の腰を解きて前の方を見ればつじみたるものあり。これは瘡にてこそありけれと」

つじうた 辻歌(名) 辻に歌ふ流行唄。

つじうら 辻占(名) 〔一〕古は辻に出でゝ往來の人の言語を聞き判斷する一種の占ひ。〔二〕今は吉凶の文句など書きたる圖を引きて我身に引き當て未來をトする一種の占ひ。

づしやか 嚴み深き有樣。●落ちつきたる有樣。(形)—づしやかなる。○源氏「心の底のづしやかなる所は」(副)—づしやかに。○源氏「白き薄樣にづしやかに書い給へれど」

つじやしろ 辻社(名) 路傍にある神社。

つじまつり 辻祭(名) 辻社の祭。

つじぎり 辻斬(名) 辻に出でゝ往來の人をやたらに斬る事。武家時代に刀をためすとて行ひたる一種の惡風。

つじぎみ 辻君(名) 辻に立ちて賣淫する女。●立君。●夜鷹。

つび (名) 陰門。(著聞)

つびたり (名) つびに同じ。(催馬樂)

つもり 積(名) 〔一〕積る事。●積りたる物。〔二〕心構へ。●心算。●豫定。〔三〕大凡の勘定。●豫算。●見積り。

つもる 積(他動四段) 見積る。●豫算を立つる。

つもる 積(自動四段) 量の增加する。●たかまる。

つもごり 晦(名) つごもりの訛り。〈俗〉